

～旧約聖書を読んで感じること～ (82) 妻イゼベルに ^{そそのか} 唆されたアハブ

アハブのように、主の目に悪とされることに身をゆだねた者はいなかった。彼は、その妻イゼベルに唆されたのである。(列上 21:25)



アハブとイゼベル Willy Pogany

アハブはイスラエルの都としたサマリアに、妻イゼベルの信仰を受け入れて、バアルの神殿を建設し、バアルの祭壇にひれ伏しました。妻イゼベルの持参金もあったでしょうし、フェニキヤの文化を取り入れ、アハブ王の時代はユダ王国に並ぶほど、豊かに栄えたでしょう。けれどもその富は、欲に目がくらんだり、妻イゼベルの入れ知恵が聖書に記されているように、暴虐によって得たものなのです。

アハブは妻の言いなりになるほどの男ですから、ある意味では穏やかな性格の、小心者であったと想像できます。それで、ユダ王国のヨシャファト王と懇意な関係になりました。その息子ヨラムに娘アタルヤを妻として与えているのです。(列下 8:18) イゼベルにとっては、アタルヤは、腹違いの娘になります。

その結婚でユダ王国もアハブの影響を受けざるを得ません。女性の感化力は侮れません。

アハブがアラム(現 シリア)の王ベン・ハダドに攻撃を受けた時です。アハブは使者を送って交渉によって解決しようとしています。結局は、戦いになり、アラムを破ることが出来ました。ベン・ハダドから二度目の攻撃を受けた時も、勝ちました。命乞いをしたベン・ハダドが見返りにダマスコを提供したことで、ベン・ハダドに帰国を赦しました。この戦闘には預言者の託宣がありました。それはベン・ハダドの全軍をアハブの手に渡す。「こうしてあなたは、私こそ主であることを知る」(列上20:13)と告げられていたのです。「主を知る」ことはアハブの関心ではなく、欲深く、戦利品に目を奪われたのです。

また、アハブは宮殿のそばにあったナボトのぶどう畑を買い取りたいと願いました。ところがナボトは嗣業の地を譲れないと断りました。アハブは王としての権威もメンツも発揮することができず、寝台に横たわり、食事もしないほどふてくされてしまいました。その時イゼベルは彼女の本領を発揮します。それは権力者の手法と言っていいでしょう。まず、公文書を偽造し、それを用いて、ナボトの町の長老、貴族などの有力者と手を組み、根回しをしておきます。ナボトに冤罪を着せます。ならず者に暴行を働かせて、ナボトを殺します。こうして、ナボトのぶどう畑をアハブのものとしたのです。この手法こそ、イゼベル、悪の権力の真相です。これを知ったエリヤは「見よ、わたしはあなたに災いをくだし、あなたの子孫を除き去る。…主はイゼベルにもこう告げられる。『イゼベルはイスラエルの壘壁の中で犬の群れの餌食になる。アハブに属する者は、町で死ねば犬に食われ、野で死ねば空の鳥の餌食になる。』」(列上21:21-24)とアハブの家の滅亡を預言しています。

やがて3度目に、今度はユダ王国のヨシャファトが領地をアラムに奪われた事を口実に、アハブと共同で戦おうと提案します。アハブの預言者たちは口をそろえて勝利を託宣します。ところが、預言者ミカヤはアハブが彼の預言者に唆されている、兵士とされる民が哀れだと主張します。アハブは逆上し戦うことにします。アハブは、ヨシャファトには王の衣服で、自分は変装をし、戦闘に出ようと提案しました。全権をヨシャファトに譲っているように見えますが、アラムの王が、「兵士や将軍には目もくれず、ただイスラエルの王を狙って戦え」と命じていたことを知っていたからでしょう。ヨシャファトが討たれることを狙っていたとしか思えません。ところが、一人の兵が何気なく弓を引き、アハブの胸を射抜いたのです。アハブは傷を負い、戦車に逃げ込みました。やがて戦闘は引き分けとなり、それぞれは、国へ帰っていきましたが、アハブは夕方になって戦車の中で息絶えたのです。